彙報

教育學會例會

十月二十六日午後六時より學生集會所に於て開催左の紹介ありたり。

Mackenzie, Hegel's Educational Theory and Practice.

櫛引友三郎君

『此の著書の眼目は余りに實質的傾向を帶び來れる現今の教育に對して、ヘーゲルの教育論を高調し、以て幾分なりとも精神的傾向を惹起せしめたいと言ふに在る。ヘーゲルに依れば、教育の意味は自然的、直接的衝動的なるものを精神的、一般的、意識的のものにする事である、而して其の目的は辯證論的の發展に依つて國家的精神に進むに在りと極端なる國家主義的教育を主張してる又其の理想は、藝術、宗教、哲學の發展に在れども彼の精神的發展的、普遍的なる哲學の見地よりして、此れがために國家の權威と價値とを失ふ事はない。更らに教育の方法としては中等教育を其の本體として古典的教育を極力、主張し、精神的科目に重きを置き、自然科學を間接的の效果あるものと見做してる。此くの如くヘーゲルの教育論の特徴若しくは缺點と見らるゝ所は、初等教育に重きを置かず、中等教育を其の本體となしたる點及び特殊教育、庶民教育、實業教育、女子教育、身體的教育を輕視したる點に在れど、其等理論より來れる多くの缺陷は其の實際的施設、經驗等に依り補はるゝ所が多い。尚末節にはヘーゲルの興味ある傳記が載せられて居る』云々と言ふのが其の大要であつた。右の講演に引き續き、山桝君の提出せる、『中等學校に於ける修身科擔任の方法如何』の問題に就て討論あり、色々の提案を見たが其の主なるものは、(一)學級主任此れを擔任すべし、(二)校長又は特別の教師此れを分擔すべし、(三)單に修身科教員をして此れを分擔せしむべし、(四)學級主任修身科擔任教員をして適當に此れを行はしむべし等の類であつた。

支那哲學會例會

西村講師及び新入會學生の歡迎を兼ね、十月二十七日午後五時半より文科第九教室に於て開催狩野教授及び平内房次郎氏の講演ありたり。

新著紹介

日蓮聖人の宗教

北尾日大編

近時日蓮聖人に關する論著誠に汗牛充棟、而して學者論ずる所時にはその趣を同じくせざるものあり、遂には彼此氷炭相容れず水火相鬪ふの觀を呈するものなきにあらず、門の内外を問はず初學のものその取捨に迷ひ、何れが果して眞日蓮義なるか、僞日蓮義なるか、その撰擇に惑はざるを得ない有樣になつて居る、茲に

直接聖人の遺文そのものに依てその眞僞を裁斷し、その眞面目を領解し、その歸趣を定めんと欲する要求の生ずる事も亦自ら止むを得ない勢ひであらう、本書は全くその要求に基いて編せられたものである、全卷を別つこと五編、總要、聖學、人格、教義、教團。更に章節項目を設くる事可なり詳密。遺文の取要拔粹、類纂組織に於ても亦尋からざる努力の結果が現はれて居る、眞目蓮義初學入門の書として恰好の編著であらう、又廣博なる聖人の遺文に對する簡便な索引的要集としても相當の成功が收められて居る樣である。併し唯編者所依の遺文が依然「廣義」のものである事は本書の性質や編者の目的などから見て何だか物足りなく感ずるがこれは理か否か。(東京新日蓮主義社發行、一定價八十錢、菊版三一六頁)(本田義英)

古代より現代まで 西洋哲學史

フランク、シルリー氏原著
文學士　若守義孝譯述

原著者フランク、シルリーはシンシナチ大學卒業後ベルリン、ハイデルベルヒの二大學に學び、歸朝後、ミッスーリ大學の哲學教授、プリンストン大學の心理學教授を經て、千九百六年、コーネル大學の哲學教授となり、遂に今日に及んで居る。氏の著述としてはLeluqiz's Controversy with Lock (1891) An introduction to Ethics (1900) 飜譯としては Paulsen's introduction to Philosophy (1885) Weber's History of Philosophy (1896) Paulsen's system of Ethics(1899)等がある。而してA History of Philosophy (1914) は最近に現はれた氏の著述であつて、之卽本譯書のオリッヂナルである。

原書は約六百頁の大册。古代希臘哲學の發端より說き起して最近の哲學界の趨勢に迄及んで居る。行文流暢比較的易解であつて哲學思想の論述に當つては、常に其背景たる時代人文に注意し哲學思想の歷史的發展は、一應て或意味に於て哲學思想其者の自己批判の有機的開展であると見て、各時代の哲學思想の有する意義及價値を闡明すると共に、夫等學說相互の關係を明瞭ならしめんとする。卽著者は出來得る限り自己の主觀を投入する事を避け、哲學者をして夫々最も純なる自己を語らしむると共に、彼等が全哲學史に於て占むる位置、有する意義を明ならしめんとするのであつて著者はかゝる研究法を historico-critical method と名けて居る。かるが故に精細なる專門的知識は此處に求むべからざるも、哲學史の一般的知識殊に哲學思想の發展の徑路を有機的に理解せんとする初學者に取りて、甚だ便利な書物であると思ふ。殊に原著は、各哲學者自身の著述は勿論、其英譯及其研究に必要なる關係書目を擧げ、最後には索引を附してあるから、更に進んで研究せんとするものに取つても甚だ好都合である。

若守文學士の譯文は飜譯臭味を脫して居ると云ふ點に於て遺憾はないが、行文稍冒調にして生氣乏しく、八百余頁の大册一氣に讀破せしむるの魅力を缺く、譯者自ら斷つて居られるやうに、逐語的に譯するのでなく、成るべく簡單に其本旨を譯述せんとせられたのであるならば、今少し文章に注意を拂ひ得る餘地が無かつたであらうか。最も遺憾に思つたのは、固有名詞の讀方の甚だ杜撰なことである。例へばLeonord da vinci のvinciをヴアンシと讀みPierre dailly をピエル、デーリーと讀むが如きは其例であるが、